

保育実践者に求められる資質の向上に関する研究

吉留早木子* 森木 朋佳**

A Study on the Way of Improving Childcare's Disposition

Sakiko Yoshidome* and Tomoka Moriki**

こども学フィールドワークⅡの授業として「純心こども講座（リズムあそび）」を担当した学生を対象に、純心こども講座での実習前と実習後に吉留（2017）で示した要素について自己評価を行う機会を与え、その結果についてまとめた。各自自己評価項目の得点は、実習前より実習後に上昇する傾向が見られた。また、自由記述の内容を分析したところ、実習前は「不安」や「緊張」など否定的なキーワードが多く出現したが、実習後は「嬉しい」や「楽しみ」などの肯定的なキーワードを含む記述が増加した。これらのことから、純心こども講座での実習を通して、吉留（2017）が示した要素が学生に実感されることが示唆された。

Key Words: 〔保育実践力〕〔保育者の資質〕〔保育実技〕〔体験的な学び〕
〔自己評価〕

(Received September 23, 2020)

はじめに

保育実践者には求められる資質が様々あるが、その中でも、実際に子どもの前に立ち、その場で対応しながらどの程度対処できるかは、重要な資質の一つであろう。

筆者の一人である吉留は、これまで本学非常勤講師として保育者養成課程にある学生を対象に、「リズムあそび」や「こども学フィールドワーク」といった授業に関わってきた。また、鹿児島県内において、幼稚園や保育所などで子どもたちのリズムあそびや体操の指導に直接関わったり、保育者向けの講座の講師としても活動したりしてきた。子どものリズムあそびや体操の指導においては、子どもがより楽しい時間を過ごせることに重点をおき、それを実現するには、大きな流れを意識しながら、その場その場で対応することが求められてきたように思う。

筆者らが担当している「こども学フィールドワークⅡ（1年次配当・演習2単位）」は、保育者養成課程にある学生が「純心こども講座」での実習を通して親子と触れ合い、実際の様子を理解したり、現場の親子と関わる中で知識や技能について学んだりすることを目的としている。「純心こども講座」は、鹿児島純心女子短期大学「江角学びの交流センターこどもの未来支援室」が主催する子育て支援講座の1つで、令和2年度は「リズムあそび」と「いろとあそぼう・かた

* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

** 鹿児島純心女子短期大学生生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

ちとあそぼう」の2講座が開講されている。吉留は、こども学専攻がスタートして2年目の平成15(2003)年度より現在まで、17年間本学の非常勤講師としてこの「純心こども講座」の実技指導に携わり、本番当日だけでなく、リハーサルを経てその準備・指導などに向け数時間を費やしてきた。森木は、平成14(2002)年度のこども学専攻開設以来「こども学フィールドワーク」の授業に携わり、質の高い保育者を養成することを目標に、授業の枠組み構築、評価に取り組んでいる¹⁾。

ところで、保育者としての学びは養成校のみで完結するものではなく、専門職としての学びは保育現場に出て以降に獲得されていくものであるが、保育者養成課程にある学生たちは、卒業後すぐ現場に出て先生と呼ばれ、あらゆる場面でその力を試される。養成校にとっては、そうした学生たちが現場ですぐに力を発揮できるよう、短期間で効果的な学びの機会を提供することが求められる。こども学フィールドワークⅡの授業で「純心こども講座」での実習を経験することは、周りに小さなこどもがいない学生にとって、実際の親子とふれあえる機会となっており、実際に実技担当者として関わっていく中で、講座前の準備段階での不安げな表情が、回を追うごとに自信に満ち溢れた笑顔に変化していく様を見てきた経験からも一定の効果があると考えられるが、子どもの前に立ち、その場で臨機応変に対処できる実践力として、どのような力が、どの程度身についたのかについて明確に示すことは難しい。

保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会による「議論のとりまとめ 中間的な論点の整理における総論的事項に関する考察を中心に」では²⁾、「保育実践の質の確保」「実践の質の向上」と合わせて、「評価」についても言及されており、養成教育の段階においても、資質向上の場(機会)の提供だけでなく、何が身についたかを明らかにしていくことが今後求められていくものと考えられる。

吉留(2017)は、これまでの実践経験をもとに子どもや保護者と関わる際に求められる要素についてまとめたものであるが、これらは吉留がこれまでの実践を通して得てきたものであり、経験によって培われた実践者の勘のようなものともいえる。そこで本研究では、学生による自己評価を手掛かりに、吉留がこれまでの実践経験から重要であると感じてきた事柄が、「純心こども講座」での経験を通して確かに獲得されていくことを裏付けるとともに、保育実践者の資質の向上を図る上での指標となる可能性について検討する。

目 的

本稿では、吉留(2017)をもとに作成した自己評価項目の妥当性について検討することを目的とする。

方 法

1. 自己評価の期日・方法・対象

令和2(2020)年6月6日に実施された「純心こども講座」での実習前(以下、事前と示す)と実習後(以下、事後と示す)にLMS(学習支援システム:Moodle)を利用して回答を求めた。

回答期間は、令和2（2020）年6月3日～令和2年6月9日とした。

対象は、令和2年度こども学フィールドワークⅡ受講生のうち、純心こども講座で「リズムあそび」を担当した学生24名である。

回答した学生の割合は、事前22名／24名（91.7%）、事後23名／24名（95.8%）であった。

2. 用いた自己評価項目について

吉留（2017）が示した基本姿勢の項目を参考に作成した³⁾。

3. 集計および分析方法

LMS（Moodle）コンテンツにあるフィードバック機能（自己評価内容の提出、分析）を利用して実施した。事前と事後の回答を比較した。自己評価項目のうち、「あてはまる～あてはまらない」の順序尺度を利用した質問項目の①～⑧については1点～5点の間隔尺度として扱った。

また、質問項目⑨「どの程度自信があるか」については、0点～10点で自己評価をつけてもらい、事前と事後の平均点を比較するとともに、平均点を事後の評価得点から事前の評価得点を引き、その差の値ごとに人数を集計した。

最後に質問項目⑩として自由記述の項目を設け、自由記述の内容には、質問項目⑨で回答された事前と事後の自信の程度についての自己評価得点と紐づけて分析した。

質問項目の詳細は、以下のとおり。

- ①講座の始まりから終了まで笑顔を保てますか？
- ②子どもとちょうどよい距離感を保てますか？
- ③子どもの受け答え（リアクション）に十分反応できますか？
- ④リズムダンスを全身で生き生きと表現できますか？
- ⑤状況に合わせて工夫して声を出すことができましたか？
- ⑥子どもと関わる機会が貴重な時間であると理解できていますか？
- ⑦子ども視線での危険個所がわかりますか？
- ⑧子どもの様子をイメージしながら講座の準備やその場の対応ができますか？
- ⑨こども講座をするにあたって、どの程度自信がありますか？（0～10で評価）
- ⑩こども講座の準備段階での不安や失敗を80～200字程度で教えてください。箇条書きでもOKです。

4. 学生による自己評価の結果

質問項目①～⑧の項目ごとの平均点は、表1に示すとおり。

表1 質問項目ごとの平均点

	事前 (N=22)	事後 (N=23)
講座の終了まで笑顔	3.91	4.43
子どもとちょうどよい距離感	3.77	4.17
子どもの受け答えに十分反応	3.86	4.43
リズムダンスを全身で生き生きと表現	4.00	4.35
状況に合わせて工夫して声を出す	3.55	4.13
子どもと関わる機会の貴重性の理解	4.82	4.70
子ども目線での危険個所の理解	3.68	4.09
子どもの様子をイメージして準備や対応	3.86	4.17

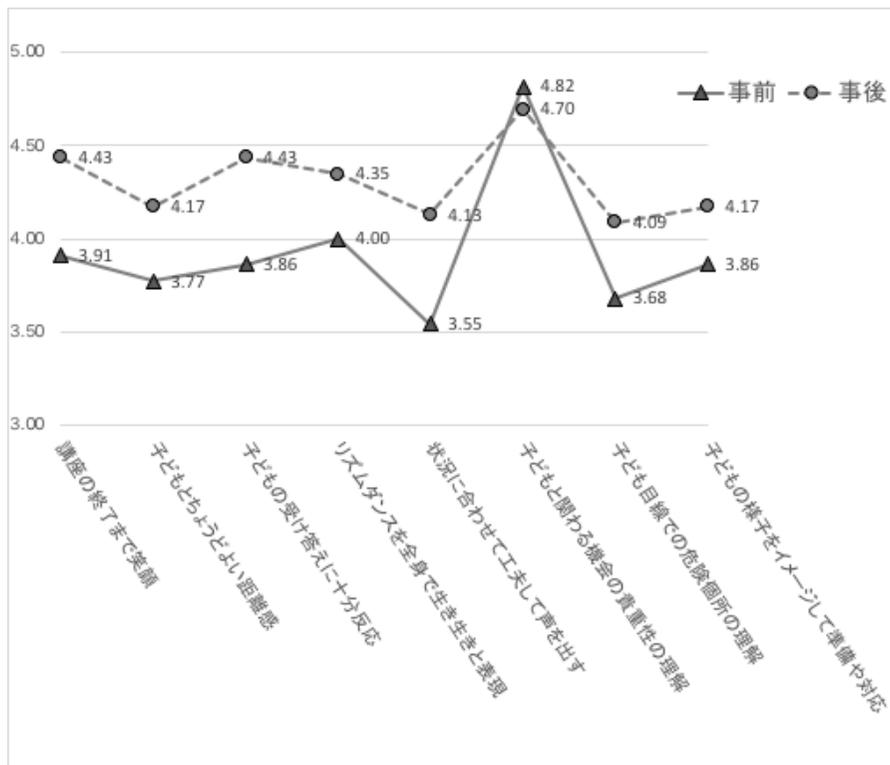


図1 質問項目ごとの平均点の比較

・全体的な傾向

表1および図1に示したように、自己評価項目ごとの平均点は事前が3.55～4.82点、事後が4.09～4.70点となり事後の評価は全て4点台になっている。

・平均得点が高い項目について

自己評価項目のうち平均点が特に高かった項目は以下の項目である。

*子どもと関わる機会の重要性の理解：事前4.82点、事後4.70点

・事前と事後の得点差が大きい項目について

- *状況に合わせて工夫して声を出す：事前3.55点，事後4.13点，差0.58
- *子どもの受け答えに十分反応：事前3.86点，4.43点，差0.57
- ・事前と事後の評価が逆転した項目
- *子どもと関わる機会の貴重性の理解：事前4.82点，事後4.70点，差-0.12

表2 自信の程度平均点 (N=20)

	事前	事後
平均 (点)	6.05	6.75

表3 事前事後の得点差の分布 (N=20)

得点差	-3	-1	0	1	2	3	4
人数 (人)	1	4	4	5	3	2	1

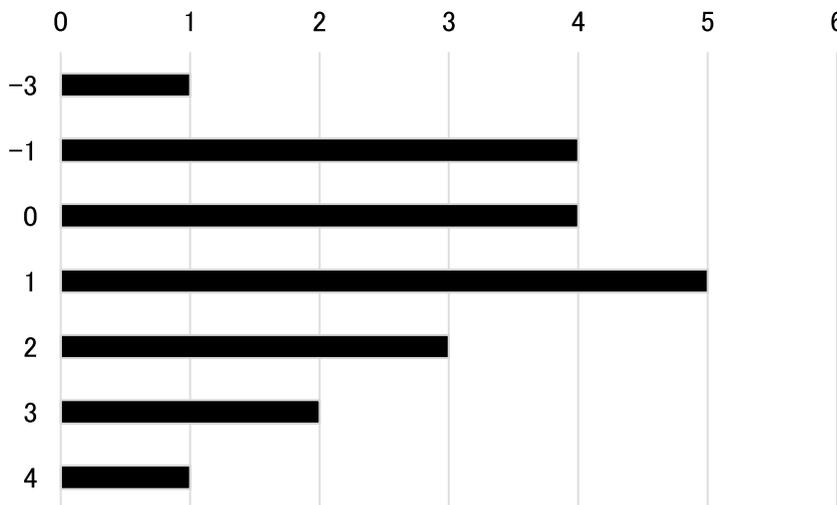


図2 事前事後の得点差 (N=20)

表2は、質問項目⑨の自信の程度（10点満点で評価）の平均を示したものである。ここでは、事前・事後ともに回答した学生（N=20）の回答を有効回答とした。事前の平均は6.05点，事後の平均は6.75点となり，自信の程度の評価は事後の方が高くなった。

表3および図2は，事前事後の得点差を示したものである。得点差は，-3点～4点の間で分布した。事後の自己評価得点が事前と同じまたは1点以上上昇した学生の人数は，15名となり明らかに上昇した。

5. 学生による自己評価の結果（自由記述）

自由記述部分は，事前と事後に分けて，肯定的なキーワードと否定的なキーワードを抽出した。例えば，肯定的なキーワードとは，「嬉しかった」「楽しかった」「次がとても楽しみ」等で，否定的なキーワードとは「緊張」「心配」「不安」等である。

回答には事前のみ、事後のみしか回答していないものも含まれていたが、全て有効回答として取り扱った。また、出現したキーワードは全てカウントした。すなわち、一人の学生の記述の中に複数のキーワードが含まれていた場合にも、複数としてカウントした。

表4 自由記述に含まれるキーワードの数

	肯定的	否定的
事前	0	24
事後	15	10

表4は、自由記述に含まれたキーワードの数をまとめたものである。事前の回答からは、肯定的なキーワードが全く出現しなかった。それに対し否定的なキーワードは24回出現した。事後においては、肯定的なキーワードは15回出現し、否定的なキーワードは10回出現した。

事前の回答において、否定的なキーワードとして出現回数の多かったものは、「不安」13回「緊張」と「心配」がそれぞれ3回となり、否定的なキーワードの79.2%を占めた。

事後の回答において、肯定的なキーワードとして出現回数の多かったものは、「嬉しい」7回、「楽しい」3回で肯定的なキーワードの66.7%となった。

また、自由記述の回答から、未記入や文の途中で回答が終わっているものを除いたところ、肯定的なキーワードや現状の分析や課題、次回への抱負を含む内容の記述が多くみられた。

6. 全体的考察

ここでは、「純心こども講座」での実習前(事前)と実習後(事後)での、自己評価得点の変化、自由記述の内容についてまとめてみたい。

(1) 自己評価得点の変化について

自己評価得点は、質問項目①～⑧のいずれについても、事前より事後の方が高くなる傾向がみられた。事後に評価が高くなったのは、純心こども講座を実際に経験することにより、それぞれの力が身についたと感じたり、意識したりされたためと考えられる。また、項目ごとの自己評価得点は、事前で4点以上となった項目は、「リズムダンスを全身で生き生きと表現できますか」と「子どもと関わる機会が貴重な時間であると理解できていますか」の2項目のみで、他の6項目は3点台の評価となった。評価が4点以上となった項目は、学生自身の状態や自身の持つ心構えについて回答を求めたもので、3点台となった6項目は、子どもとの関わりについて回答を求めたものである。これらのことから、その場で求められる対応力の獲得には、直接経験することによって学生自身に実感されることが大切であることが示唆された。

(2) 自由記述の内容について

自由記述の内容に肯定的なキーワード、否定的なキーワードがどの程度含まれているか、どのようなキーワードが使用されているかについて検討したところ、事前は「不安」「緊張」といった否定的なキーワードが多く含まれ、事後には「嬉しかった」「楽しかった」などの肯定的なキーワードが多く含まれることが明らかになった。このことは、先に示した自己評価得点が事前よりも事後の方が高くなったことと関連しているのではないかと考えられる。

さらに、記述内容を詳しく分析してみると、事前よりも事後の方が文章が長くなった学生は

16名(69.8%)となった。記述内容にも変化が見られ、事前は漠然とした不安や緊張について言及した内容が多いのに対し、事後は具体的な場面について取り上げ、その時感じたこと、工夫したこと等が記述されていた。以下に、学生の記述内容の例を紹介する。

※表記は学生の記述のまま

- * 子ども達が本当に喜んでくれるかの不安があったり、自分達が一から企画、準備したものが保護者の目線から見ても安心できる内容になっているのかなどの緊張もあったが当日の子ども達が楽しんでる様子を見て凄く嬉しかったし安心しました。
- * サーキットで遊ぶ時間はサーキットで本来計画していた遊び方にならなかった。私はボーリングの担当の係でフラフープを置いてそこから3人ずつするつもりだったが、ペットボトルのピンを全部倒してからペットボトルを上積み上げて倒したり、ボールで遊んだり様々な遊び方をして本来の遊びが出来なかったので時間より前にスタンバイをして最初の子供から説明して遊べたらよかったと思った。また、ダンス遊びでは私の担当の子は2歳の女の子だったが、お母さんの後ろに隠れてあまり触れ合うことが出来なかったので、次は対応を考えたいと思った。
- * 担当した子供がなかなか一緒にダンスをしてくれなくて、どのように声をかければ良かったのか分からなかったです。また、子供の発言に対して、適切な返答をすることが出来なかった。

これらのことから、純心こども講座での子どもと直接関わることによって、「嬉しい」や「楽しい」という肯定的なキーワードは、具体的な経験を伴った実感として、学生たちに印象付けられたものと考えられる。

自己評価得点の上昇や、自由記述の内容に肯定的なキーワードが増えること、内容が具体的になることから、1回での実習であっても学生の実感に変化することが示された。

ところで、こども学フィールドワークの授業では、純心こども講座で複数回実習することを求めている。自由記述には「次回はこうしたい」や「～できるようになりたい」という記述も多くみられた。複数回の実習の機会を準備することは、こうした学生の気づきを、感じただけで終わらせるのではなく、課題として捉え挑戦する機会となっており、授業の設計として意味があるものと考えられる。

以上、事前と事後の学生による自己評価得点の変化と、自由記述の内容の変化から、保育実践者に求められる資質とその向上のあり方について検討してきた。吉留が実践の中で見出してきた保育実践者に求められる要素は、こども講座での実習を通して学生に実感されてるものと考えられるが、今回の調査のみではデータ数が少なく、そうした傾向が見出されるのではないかということを示すことしかできない。項目の妥当性については、今後引き続きデータを収集し検討する必要がある。今後予定されている講座においても同様に調査を実施し、研究を深めたい。

わずか1回の調査で結論を導き出すのは、飛躍しすぎであるが、学生の自由記述の内容からは、

肯定的な感情と自己評価得点との間に関連性が感じられた。すなわち、純心こども講座で実践を経験することにより自信が獲得され、結果として事前よりも事後の自己評価得点の方が高くなった可能性が示された。今後調査を続けていくことで、学生による自己評価とはいえ、実践の経験をふまえることが学生にとって大きな自信を生み出すことが見出されるものと予想される。今回作成した質問項目が利用可能なものであり、次へ繋がる期待を抱かせる結果が導き出せたことを、本稿の成果としたい。

7. 今後の展望

本研究の目的は、吉留がこれまでの実践経験から重要であると感じてきた事柄が、実際に経験することを通して獲得されていくことを確認するとともに、保育実践者の資質の向上を図る上での指標を作成することにある。

しかしながら、今年度は世界的な新型コロナウイルス感染症の流行拡大を受け、本学でも授業の内容変更など対応を迫られる場面があった。そのため、今回の報告では、1回の実践について報告するのみに留まっている。予定していた1回の講座が中止となり、調査も中止せざるを得なかったため、データ数が予定の半分であった。今年度中にあと2回の純心こども講座講座が予定されているので、同様の質問項目を利用した自己評価の調査を継続したい。

吉留がこれまでの実務経験をもとに獲得した実践者としての勘、あるいはコツのようなものを、保育実践者に求められる要素として捉え、それらを実践力の評価指標として確立させていくことで、保育実践者の資質向上へと結びつく研究へと発展させていきたいと切望している。

おわりに

「純心こども講座」は、こども学専攻開設当初より一度も絶えることなく継続してきた。回を重ねるごとに変化していく学生の様子から筆者らは、これらの機会が、今後保育実践者となっていく学生の指導力や想像力を生み出す源の一つになり得ていると実感している。こうした実感を、確かな実践力としていけるよう、今後も検討を続けていきたい。

註

- 1) 例えば、森木・伊瀬知(2014)「こども学フィールドワークⅡの授業実践報告 第9報」などで、授業の設計や展開計画、学生の自己評価に基づく授業の効果について検討している。
- 2) 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会、「議論のとりまとめ『中間的な論点の整理』における総論的事項に関する考察を中心に」2020(令和2)年6月26日、p.17
- 3) 項目の詳細は、吉留早木子(2017)「子育て支援者を支える」『想林』第8号p.63の(1)基本姿勢の項目を参照のこと。

引用・参考文献

- 森木・伊瀬知（2014）「こども学フィールドワークⅡの授業実践報告 第9報」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』, 第44号, 鹿児島純心女子短期大学 pp. 101-110
- 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会, 「議論のとりまとめ『中間的な論点の整理』における総論的事項に関する考察を中心に」2020（令和2）年6月26日
- 吉留早木子（2017）「子育て支援者を支える」『想林』第8号, 鹿児島純心女子短期大学江角学
びの交流センター, 地域人間科学研究所編 pp. 61-67

